

One's way構文についての一考察—相特性の観点から—

佐藤 聖

0. はじめに

one's way構文とは(1)に示されるもので、(2)の形式を持つ英語に特有の構文である。^{*1}

- (1) a. He worked his way through the book.
b. She talked her way out of the class.
c. The boy pushed his way through the crowd.
d. The explorers cut their way through the jungle. (Levin (1993))

- (2) Subject NP_i + V + one's way + PP/Adverb

(2)においてone's wayのoneは必ず主語と同一指示でなくてはならないが、wayは主語名詞句が単数であれ複数であれ常に単数形のwayである。また、この構文は方向を表す前置詞句 (PP)あるいは副詞 (句) を伴う。この形式を持つ構文に本来「移動」を意味しない動詞が生じて、構文全体として「様々な様態を伴った移動」を表す。例えば (1c) は「少年が人混みの中を押し進みながら通り抜けた」という「移動」の解釈を持つ。

このone's way構文の統語的な特徴として、他動詞と非能格動詞の多くを主動詞として認可するが非対格動詞は認可されないということが論じられている (Maranz (1992), Levin (1993), Levin and Rappaport Hovav (1995))。

(3) *Unergative Verbs*

- a. They shopped their way around New York.
b. He worked his way through the book.
c. She talked her way out of the class.

(4) *Transitive Verbs*

- a. She stipulated her way out of the problem.
b. The boy pushed his way through the crowd.
c. The explorers cut their way through the jungle.

(5) *Unaccusative Verbs*

- a. *The children came their way to the party.

^{*1} “make one's wayなどPPを伴わないものもあるが、ここではPPを伴うものについて考察する。

- b. *The flower bloomed its way to a prize.
 c. *They disappeared their way off the stage. (Levin (1993))

高見・久野(1999)では、(3)(4)と(5)との対比に基づくMaranz (1992)、Levin and Rappaport Hovav (1995)などの主張を(6)のようにまとめている。

(6) Way構文に課される非能格性制約：

Way構文には、非能格動詞のみ現れ、非対格動詞は現れない。^{*2} (高見・久野 (1999))

しかしながら、より注意深い観察により、高見・久野 (1999) は(6)の主張に対して反例となる事実をあげて、one's way構文が動詞の非能格性を調べる診断テストとはならないと主張している。この反例となる第一の事実は、非能格動詞でもone's way構文に現れない場合があるということである。以下に示す例を考えてみよう。

- (7) a. *Bill *walked/ran* his way down the hallway. (Napoli cited by Jackendoff(1990))
 b. *He *swam* his way from one end of the pool to the other.
 c. *She *dove* her way into the fire. (Goldberg(1995))

(7)において、動詞run, swim, diveはそれぞれ主語の意図的行為を表しており、非能格動詞である。しかしながら、これらの非能格動詞がone's way構文に生じると不適格な文となってしまう。したがって、(6)の制約は(7)を適格なものとして誤って予測してしまうという点で弱すぎるということである。

さらに、反例となる事実として、非対格動詞でもone's way構文において認可されるものがあるという事実があげられている。

- (8) a. The avalanche *rolled* its way into the valley.
 b. The barrel *rolled/tumbled* its way down the alley.
 c. Rainwater *trickles* its way to the underground pool.
 d. Blood *dripped* its way from his head to his shoulder, and from there to the ground. (高見・久野 (1999))

(8)において、主語は無生物であり、動詞はこれらの主語によって表される個体の非意図的動作を表している。よって、(8)で生じている動詞は非対格動詞である。(7)の制約はこれらの非対格動詞はone's way構文に生じないと予測するが、この予測に反し(8)はすべて適格な文である。従って、(8)を誤って排除してしまうという点で、(7)の制約は強すぎるということになる。以上の2点の観察 ((i) 非能格動詞でもone's way構文に現れない場合がある、(ii)非対格動詞でもone's way構文において認可されるものがある) によって、高見・久野(1999)は(6)のWay構文

^{*2} 高見・久野 (1999) では、ここでいうone's way構文を「Way構文」と称しているので、ここでは原典通りに引用した。

に課される非能格性制約が妥当でないと結論づけ、機能的代案を提示している。(高見・久野(1999)の分析については次節で概観する。)

本稿では、高見・久野(1999)におけるWay構文に課される非能格性制約に対する批判と代案を妥当なものと考え、特に上記の(ii)非対格動詞でもone's way構文において認可されるものがあるという事実に注目して考察を行っていく。そのうえで、英語においては語彙レベルで相特性を変更する規則があるということを提案し、one's way構文はこの規則の適用によって生成されるということを主張する。すなわち、one's way構文の適格性は動詞の非能格性で決定されるのではなく、動詞の相特性によって決定されるということになる。この点では、本稿の分析はJackendoff (1990) の分析と似通っているが、Jackendoff (1990) が誤って排除してしまう事例も適切に取り込むことが出来る。また、高見・久野 (1999) で提案された「Way構文に課される機能的制約」の大部分が、本稿で提示する分析から導き出されるということも示していく。

1. 先行研究

本節では、one's way構文に関する先行研究として、機能的分析を提示している高見・久野(1999)と語彙概念構造の観点から分析を行っている影山・由本(1997)を概観していく。

1.1. 高見・久野(1999)の分析^{*3}

高見・久野(1999)では、one's way構文の適格性は動詞の非能格性や動詞の意味だけに基づいて決定されるものではなく、文全体の意味とone's wayの機能によって決定されるものであるとし、以下に示すone's way構文に課される機能的制約を提案している。

- (9) Way構文に課せられる機能的制約：Way構文は、
- (i) (ありきたりなものではない) 物理的、時間的あるいは心理的距離が存在し、
 - (ii) 主語指示物が、独自の様態で
 - (iii) その距離全体を徐々に移動し、
 - (iv) 動詞がその移動の様態を表す
- 場合にのみ、適格となる。 (高見・久野(1999))

まず、(9i)について見てみよう。以下の(10)と(11)の対比を考えてもらいたい。

- (10) a. John laughed his way *out of the room*. (経路)
b. Mike moaned his way *through the tunnel*. (経路)
- (11) a. *John laughed his way *in the room*. (場所)
b. *Mike moaned his way *in the tunnel*. (場所) (高見・久野(1999))

^{*3} 1.1.節で引用した例文はすべて高見・久野(1999)からのものであるが、それぞれの例文については原典を表示している。

(10)は経路 (path) を表す前置詞句を含んでおり、この場合はone's way構文は適格なものとなる。他方、経路ではなく単なる場所を表す前置詞句を含む(11)は不適格である。これは、(10)のように経路を表す前置詞句を含む場合にのみ、主語指示物が移動する物理的な距離が示されており、よって(9i)の制約を満たすためである。^{*4} また、物理的距離ではなく、時間的距離や心理的距離が示される場合もある。

(12) a. He traveled his way *through the 60's*, and worked his way *through the 70's*.

(時間的距離)

b. Babe Ruth homered his way *into the hearts of America*. (心理的距離)

(高見・久野 (1999))

(12a)では、前置詞句*through the 60's, through the 70's*が60年代の初めから終わりそして70年代の初めから終わりという時間的距離を表している。(12b)では、前置詞句*into the hearts of America*が、ベーブ・ルースが無名だった状態からホームランを打つことによってアメリカ人の誰にも知られ、愛されるようになるまでの心理的距離を表している。このように時間的距離あるいは心理的距離が表されている場合もone's way構文は適格なものとなっている。これに対し、距離を示さない前置詞句が生じた場合は不適格な文となる。

(13) a. *He traveled his way *in/during the 60's*, and worked his way *in/during the 70's*.

b. *Babe Ruth homered his way *in the hearts of America*. (高見・久野 (1999))

(13)のone's way構文は、物理的距離、心理的距離そして時間的距離のいずれも含まないため、(9i)の「Way構文には、(ありきたりのものでない) 物理的、時間的あるいは心理的距離が存在しなければならない」という制約に違反し、不適格なものとなっている。

次にone's way構文では、主語指示物が独自の様態で移動し(9ii)、動詞がその移動の様態を表す(iv)という制約について見てみよう。

(14) a. The avalanche rolled *its way* into the valley.

b. John belched *his way* out of the restaurant. (高見・久野 (1999))

(14a)では、雪崩が転がり落ちながら移動したという独自の移動様態が動詞rollによって表され

^{*4} one's way構文において距離を表すのはほとんどの場合経路を表す前置詞句であるが、(i)のように副詞が生じ、それが表す方向によって距離が示唆される場合もある。

(i)But there's no machine that can tie shoelaces or find its way home, or basically learn very much from experience.

また、動詞+one's wayのみで距離が示唆される場合は、距離を表す前置詞句や副詞が共起していなくても適格なものとなる。

(ii)Horticulture was a new course so the staff were *feeling their way* just as much as the new batch of students. (高見・久野 (1999))

これらの事実は、one's way構文の分析に取り込まれなくてはならないものであるが、本稿で提示する分析では特に扱わない事とし今後の研究の課題とする。

ている。(14b)では、ジョンの移動がげっぷをしながらであったという独自の様態が動詞belchによって表されている。このように主語指示物の独自の移動様態が動詞によって表されるとき、one's way構文は適格となる。他方、以下に示す例のように主語指示物の移動のみ表し、独自の様態が表されない場合は非文となる。

- (15) a. *John *went/came* his way to the bank.
b. *Mary *moved* her way through the crowd.
c. *Bill *walked/ran* his way down the hallway. (高見・久野 (1999))

(15a,b)において、動詞go、come、moveは主語指示物の移動のみを表しており、移動の際の様態は全く含まれていない。したがって、主語指示物が独自の様態で移動するという解釈を持たず、主語指示物の独自の移動様態を動詞が表す事もないため、(9ii)と(9iv)のone's way構文に課せられる制約を満たさず非文として排除される。また(15c)においては、動詞walk、runが主語指示物の移動の様態を表してはいるものの、その移動様態が他の人とは異なる独自の様態でないため、(9ii)の制約を満たさず不適格となる。

最後に、(9iii)の「主語指示物がone's way構文において表される距離を徐々に移動しなくてはならない」という制約について見てみよう。

- (16) a. John belched *his way* out of the restaurant.
b. John belched when he went out of the restaurant. (高見・久野 (1999))

(16b)では、ジョンはレストランを出る際に1回だけげっぷをしたかもしれず、外にでるまでの間ずっとげっぷをしていたということは示さない。これに対し、(16a)のone's way構文では、ジョンがレストランを出るまでの間ずっとげっぷをしていたという含意がある。このように主語指示物がone's wayによって表される距離を徐々に移動するということをone's way構文が含意するという事は、以下の対比からもわかる。

- (17) a. The kid jumped his way *to* the sandbox.
b. *The kid jumped his way *into* the sandbox. (Goldberg (1995))

(17a)では、前置詞toが生じており、子供が繰り返し飛び跳ねながら砂場へ移動したことが示されている。この場合、one's way構文は適格となる。ところが、(17b)では、子供が1回だけ跳んで砂場へ移動したという含意しか持たず、子供が徐々に移動したということは意味しない。この場合は、one's way構文は非文法的なものとなる。また、動詞が表す事象が瞬間的なものである場合は、明らかに(9iii)の制約に違反し、不適格なものとなる。以下の例を考えてみよう。

- (18) a. *The explosions *occurred* their way onto the front page.
b. *She *arrived* her way to the front of the line.
(Levin and Rappaport Hovav (1995))

(18)では、「爆発が起こること」や「到着」といった瞬間的な事象が表されている。よって、主語指示物が徐々に移動するというのではなく、(9iii)の制約に違反し不適格となる。

本稿では、以上の高見・久野(1999)の議論が妥当なものであると考え、特に(9iii)の制約に注目して考察を行う。^{*5} 第2節において(9iii)がone's way構文に特有の制約であることを示唆し、これが語彙レベルで適用される相特性を変更する規則によって導き出されることを主張していく。また、それ以外の(9)で提示されたWay構文に課せられる制約の大部分が、このone's way構文に特有の相特性から派生的に導き出されるということも見えていく。本稿で提案する相特性の変更規則は語彙レベルで適用されるものであり、動詞の語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure = LCS)を変えるものである。よって、本稿で提示する分析に入る前に、LCSに基づく説明を行っている先行研究として影山・由本(1997)を概観することにする。

1.2. 影山・由本(1997)の分析

影山・由本(1997)では、one's way構文をpush型、inch型、beg型の3種類に分類して考察を行っている。

- (19) a. push型：動詞が、主語指示物が進むための原動力ないし手段を表すもの。
b. inch型：動詞が、主語指示物の移動の様態を表すもの。
c. beg型：動詞が、主語指示物の移動に伴う付帯動作を表すもの。

それでは、まずinch型の分析から見ていくことにしよう。inch型のone's way構文には、「移動していく様子そのもの」を表す動詞が生じる。以下にその具体例をあげる。

- (20) a. Alice Slade inched her way apologetically into the room. (部屋の中へと徐々に進んだ)
b. Because he was so small he could worm his way through the crowd. (小柄だったので、雑踏の中をモゾモゾとすり抜けていくことができた。)
c. The water gurgled its way into the drain. (水がゴボゴボと配水管に流れていった。)
(影山・由本(1997))

inch型は、(20c)に示されるように無生物を主語としてとることが可能である。また、(21)に示すように、one's wayを伴わなくても適格な文として成立し、影山・由本(1997)によると、その場合でも実質的な意味はone's way構文と変わらない。^{*6}

^{*5} Goldberg(1995)は、one's way構文では主語指示物が移動する際に困難性が伴うということが含意されると主張している。しかし、高見・久野(1999)では、これはWay構文に課せられる機能的制約(9)から派生的に得られるもので、one's way構文に本質的に課せられる制約ではないとしている。本稿では、第4節で、主動詞の本来の相特性がone's way構文の要求する解釈に合うように変更されることによって、この困難性の含意が生じると論じていく。

^{*6} 相特性について見てみると、(21)はone's wayとは異なる解釈をもつ。したがって、本稿ではinch型のone's way構文で意味を変えずにone's wayを省略することはできないと考える。このことについての詳しい議論は、2節、3節で行う。

- (21) a. Alice Slade inched into the room.
 b. Because he was so small he could worm through the crowd.
 c. The water gurgled into the drain. (影山・由本(1997))

inch型のone's way構文に生じる動詞としては、ほかにthread、zip、edge、weave、corkscrew、spiral、cannonball、zap、skyrocketなどがある。影山・由本(1997)では、これらのinch型においては動詞によって表される様態が移動の概念そのものを特定化しているとして、(22)のLCSを仮定している。

(22) inch型における移動様態の指定

[x_i ACT] CAUSE [x_i MOVE]

|
 { 'by inches'
 'like a worm'
 'with a gush' }

(影山・由本(1997))

次に、push型の分析を見てみよう。push型のone's way構文に生じる動詞には、自動詞（非能格動詞）と他動詞がある。これらの動詞に共通する特性として、働きかけ（ACT (ON)）の意味を持つということがある。(23)に他動詞の例、(24)に自動詞の例を示す。

- (23) a. With a violent thrusting movement of his powerful arms [he] pushed his way through.
 b. For over a year he had been beating his way along the south shore of Lake Superior as a clam-digger and a salmon-fisher.
 c. Bonaly doesn't so much skate as pump her way around the ice.
 (ボナリーはスケートを滑っているというよりも、ポンプを押しているようにすさまじい勢いでスケートリンクを回った。)

- (24) a. He worked his way up to assistant manager.
 b. They [Americans] fought their way slowly and painfully across the Pacific.
 c. She lied her way out of trouble. (嘘をついて苦境から逃れた) (影山・由本(1997))

影山・由本(1997)によると、push型のone's way構文の意味は「作成」の意味からの拡張であり、主動詞が表す働きかけ(ACT ON)の概念と「通り道が生じる」という結果の発生とを合成したものであると分析している。そして、push型に対しては、(25)に示すLCSを仮定している。

(25)上位事象

下位事象

[[x ACT(ON w)] CAUSE [BECOME [x's WAY BE [_{Path}]]]

↓ ↓

He *pushed*

↓

↓

his way through the crowd (影山・由本 (1997))

(25) は、「(群衆を) 押すことで群衆の間に通り道を作る」ということを意味し、転じて「群衆の中を押し分けながら通り抜ける」という意味となる。(25)に示されるように、push型は必ず上位事象として「働きかけ (ACT (ON))」を含まなくてはならない。「働きかけ (ACT (ON))」の概念を含まない動詞が生じると、次例のように不適格となる。

(26) a. *The ghost appeared its way into the town.

b. *The window opened/broke its way into the room. (影山・由本 (1997))

(26a)は「出現」を表し、「働きかけ(ACT (ON))」という概念ではなくBECOME [BE]あるいはBEという概念を含むものであり、この場合はone's way構文は不適格となる。また、同様に「働きかけ (ACT (ON))」という概念ではなくBECOME [BE]という概念を含む状態変化動詞(26b)もone's way構文に生じることが出来ない。このようにpush型は、上位事象として「働きかけ (ACT (ON))」の概念を含まなければならないので、主語は必然的に人間(動作主)となる。

それでは最後に、beg型のone's way構文について見てみよう。beg型は「～しながら」という移動に伴う随伴動作を表すものである。以下に例を示しておこう。

(27) a. when I...talked my way past the barman and into the card room.

b. While some [baseball players] work hard to get into condition, others simply play their way into shape. (プレイしながらコンディションを整えていく。)

c. Mrs. Robinson grumbled her way to the front door without haste.

(影山・由本 (1997))

beg型の特徴として、合成された2つの事象の意味的なつながりがpush型と比べると緩やかであるということがあげられる。以下の対比を考えてみよう。

(28) a. push型 : There are cases of students buying their way into some private universities. (金を使って大学に入る。)

b. beg型 : We'd bought and bought our way up the Italian peninsula. (買い物をしまくりながら、進んでいった。)

(影山・由本 (1997))

(28a)のpush型では、「金を使うこと」が移動の原動力になっている。つまり、「金を使うこと」と移動との間には使役関係が成立している。これに対し、(28b)のbeg型では、「買い物をする」という行為と「イタリア半島を北へ進む」という移動との間には本質的必然的關係はない。このことから、beg型のone's way構文には(29)のLCSが仮定されている。

(29) [x ACT (ON w)] ACCOMPANY [x MOVE [Path]] (影山・由本 (1997))

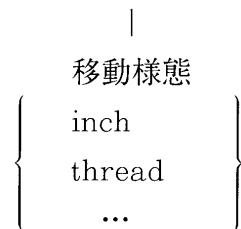
(29)において、「働きかけ」を表す事象ACTと「移動」を表す事象MOVEはACCOMPANYという概念を介する形で合成されている。つまり、push型で上位事象と下位事象との間に使役関係があるのに対し、beg型では2つの事象は並列関係にある。

以上、影山・由本 (1997) の語彙概念構造に基づく分析を概観したが、次節ではone's way構文を相特性の観点から考察し、影山・由本(1997)の分析に異議を唱え、本稿での分析を展開していくこととする。

2. one's way構文の相特性

本節では、one's way構文の相特性に注目して考察を行う。そして影山・由本 (1997) の分析を再検討し、その妥当性を検討していく。またone's way構文がその構文に特有の相特性を持つということを論じていく。まず、影山・由本 (1997) の分析を検討するにあたり、影山・由本 (1997) で提示されているone's way構文のLCSをここにまとめて再録しておく。

(30) a. inch型 : [x_i ACT] CAUSE [x_i MOVE]



b. push型 : [x ACT(ON w)] CAUSE [BECOME [x's WAY BE [Path]]]

c. beg型 : [x ACT(ON w)] ACCOMPANY [x MOVE [Path]] (影山・由本 (1997))

まず、ここでinch型とpush型のLCSにCAUSEという概念が用いられていることに注意してみよう。(30a,b)のLCSは、それぞれのone's way構文が使役関係を意味するものであることを示している。つまり、先行する事象 [x_i ACT]、[x ACT(ON w)] が後続する事象 [x_i MOVE]、[BECOME [x's WAY BE [Path]]]を引き起こすということである。(30a,b)のLCSは、この使役関係を表すという点で、以下に示す状態変化動詞のものと同じである。

(31) a. LCS of *cut*: [x CAUSE [y develop linear separation in material integrity...]]

(Hale and Keyser (1987))

b. LCS of *bake*: [x CAUSE [y BECOME cooked]]

(Levin and Rappaport Hovav (1989))

このようにCAUSEをLCSにもつ動詞は、ある事象を「引き起こす」という意味を持つことからわかるように、明確な終点を持つ出来事 (event)、つまりVendler (1967) の分類におけるAccomplishmentである。(31)では、xが、yにおける状態変化を引き起こすという出来事を表し、その出来事の終点は「ある結果状態の生起」という形で明示される。同様に(31)のような複合

的なLCSにおいても、この解釈が得られる。

(32) [[x ACT] CAUSE [BECOME [y<STATE>]]]

(Rapaport Hovav and Levin (1996))

(32)は、xの働きかけがyにおける状態変化を引き起こすということを意味する。

それでは、(32)に非常に似通った形のLCSを持つinch型とpush型のone's way構文について考えてみることにしよう。まず、inch型について次の例を考えてみよう。

(33) a. The ball was *bouncing its way* into the street when a child saw it and ran after it.

b. She dropped everything she was carrying; the bag broke, and the ball *bounced* into the street. (高見・久野 (1999))

(33a)のone's way構文は、(33b)のようにone's wayが生じていない場合でも非文とならないことから、inch型であるということがわかる。仮に(33a)が(30a)のLCSを持つとすると、ボールの何らかの働きかけがボールの移動を引き起こし、その移動は「跳ねながら」という様態を伴うという解釈を持つはずである。さらに、(33a)によって表される出来事は、主語指示物の「移動が生じる」ということによって終点を明示するものと予測される。しかしながら、この予測は事実と反する。高見・久野(1999)によると、(33a)はボールが通りへ至るまでの間何度も弾みながら転がって移動しており、その「ボールが徐々に転がっていく様子」を子供がずっと見て追いかけているという解釈を持つ。つまり、(33a)では、「移動」が生じたかどうかということに焦点があるのではなく、「移動の過程」に焦点があるのである。これに対し、one's wayが生じていない(33b)では、「移動の過程」は示されず、ボールが単に弾んで通りに出たという点のみが表されている。したがって、inch型のone's way構文に(30a)のLCSを仮定する影山・由本(1997)の分析は妥当性に欠けるといえる。さらに、以下に示す事実は、(30a)のLCSが妥当ではないということをより明らかに示している。

(34) a. John is running. →John has run.

b. John is breaking the vase. →John has not broken the vase.

c. The ball is bouncing its way into the street. →The ball has bounced.

(34)は、非完結相によるテスト(imperfective paradox)である。(34a)に示すように行為動詞(activities)の場合は、進行形はその動詞によって表される行為がすでに行われている事を含意する。他方、(34b)に示されるように、達成動詞(accomplishments)の場合は、進行形が動詞によって表される出来事をすでに行っているという含意を持たない。(34c)のone's way構文の場合、動詞によって表される行為に限ってみると、(34a)の行為動詞(activities)と同じ振る舞いを示していることがわかる。^{*7} よって、inch型のone's way構文に対しCAUSEを含むLCSを仮定する影山・由本(1997)の分析は、inch型のone's way構文が達成(accomplishment)を意味すると誤って予測してしまうという点で妥当性に欠けるといえる。

次に、push型のone's way構文について見ていくことにしよう。まず、2つの事象からなる複合的なLCSについて考察を行う。複合的なLCSとして典型的なものとして(32)のLCSがある。

(32) [[x ACT] CAUSE [BECOME [y<STATE>]]] (Rapaport Hovav and Levin (1996))

(32)のLCSを持つものの具体例として(35)の結果構文をあげておこう。

(35) a. Phil swept the floor clean.

b. LCS: [[x ACT <SWEEP> y] CAUSE [BECOME [y <STATE>]]]

(Rapaport Hovav and Levin (1996))

(35b)のLCSにおいて、先行事象はCAUSEという概念を介して後続事象と結びつけられている。そして、このCAUSEは使役関係を表すので、先行事象に表される「(主語指示物 (x = Phil) の目的語指示物 (y = the floor) に対する) 働きかけ (ACT)」の結果として後続事象の「(目的語指示物における) 状態変化」が生じるという解釈を持つ。つまり、「働きかけ (ACT)」という事象と「状態変化」という事象との間には、直接的な因果関係が成り立っていると言える。このことを時間軸上に図示すると以下のようなになる。



ここで、矢印は時間の進行を表している。(36)は、まず主語指示物xの目的語指示物yへの働きかけ (ACT) が起こり、これが目的語指示物における状態変化 (CHANGE) を引き起こし、最終的に出来事 (event) の終点として目的語指示物における結果状態が生じるという一連の出来事 (event) を表している。

それでは、影山・由本 (1997) で提示されたpush型のone's way構文のLCSについて考えてみよう。push型のone's way構文は、(25)に示されるようにLCSにCAUSEという概念を含み複合的な形をしているという点で、(32)と非常に似通ったLCSを持つ。

(25) [[x ACT (ON w)] CAUSE [BECOME [x's WAY BE [Path]]]] (影山・由本 (1997))

したがって、まず主語指示物xの働きかけが起こり、それをきっかけとして「経路」が徐々に生じるという出来事 (event) が起こり、最終的に完全な (始点と終点の明確な) 「経路」が出来上がるという、一連の出来事が時間軸に沿った形で順序立てて起こる解釈が得られると予測される。

*7 動詞によって表される行為だけではなく、one's way構文全体としての相特性を考慮すると事情はもう少し複雑なものとなる。例えば(i)の例では、文全体としては明確な終点を持つ出来事 (accomplishment) をあらわすと考えられる。このことについては、後ほど詳しく考察することとする。

(i)a. The avalanche rolled its way into the valley.

b. John belched his way out of the restaurant.

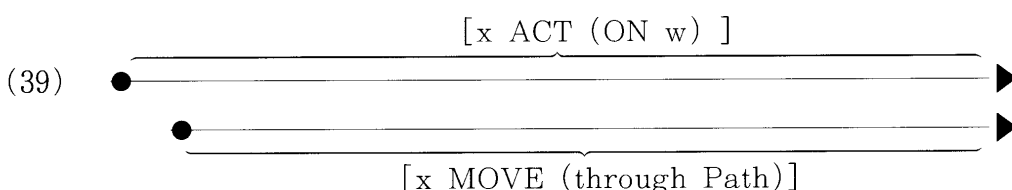
この解釈を図示すると(37)のようになる。



しかしながら、事実はこの予測に反し、push型のone's way構文は(37)に示される解釈は持たない。(38a)と(38b)の対比について考えてみよう。

- (38) a. Willy jumped into Harriet's arms.
 b. Willy jumped his way into Harriet's arms. (Jackendoff (1990))

Jackendoff (1990)によると、(38a)はWillyのジャンプが1回だけだった事を含意するが、(38b)のone's way構文の場合は何回かの連続したジャンプが含意される。影山・由本(1997)の議論によると、これは、(38a)の動詞jumpが移動そのものを表すのに対し、(38b)のone's way構文に生じている動詞jumpは移動に「付随する」様態あるいは推進力となる動作を表していることを意味する。この(38b)の解釈を図示すると、(39)のようになる。



(39)の解釈によると、主語指示物(x)の働きかけ(ACT)は、xの移動(MOVE)のきっかけを作るかもしれないが、単に移動の原因や原動力を作り出すのではなく、xの移動に付随する動作であるということになる。したがって、(37)に示される解釈をもたらずLCS(25)をpush型のone's way構文に対して仮定する影山・由本(1997)の分析は、この構文の意味を適切にとらえていないと言える。

また、push型のone's way構文が達成動詞(accomplishments)と同様のLCS(25)を持つとすると、単に経路の作成という行為の結果として経路が生じるということの意味するだけで、経路ができあがるまでの過程については何も示さないということになる。影山・由本(1997)によると、LCS(25)は、例えば“He pushed his way through the crowd”の場合「群衆を押すことで、群衆の間に通り道を作る」という解釈を持ち、そこから転じて移動の意味が生じる。しかしながら、LCS(25)の解釈を厳密に考えると、主語指示物の働きかけによって単に経路が生じたことしか意味せず、「徐々に」経路が生じていったという意味は持たない。つまり、LCS(25)をpush型のone's way構文に対して仮定する影山・由本(1997)の分析は、達成を意味する(38a)と「徐々に移動する」ということを含意するone's way構文(38b)の解釈の違いを正しくとらえることができないのである。

これまでの議論をまとめると、push型にしるinch型にしるone's way構文は、CAUSEを伴う複合的なLCSによって表される解釈を持つのではなく、(39)に示されるような解釈を持つということである(おそらくbeg型についても同じ分析が成り立つと考えられる)。そして、この解釈

はone's way構文に特有のもので、この構文の相特性における特殊性と相関するものである。以下では、このone's way構文の相特性における特殊性について見ていくこととする。この特殊性とは、主動詞によって表される出来事(event)がもつ相特性と構文自体が表す相特性が異なるということである。

まず、one's way構文の主動詞によって表される出来事(event)がどのようなものであるかについて考察を行っていきこう。1. 1節で見たように、高見・久野(1999)において、one's way構文では「動詞の表す行為が指定された距離全体に及ばなければならない」ということが指摘されている。例えば、次の例について考えてみよう。

- (14) a. The avalanche rolled *its way* into the valley.
b. John belched *his way* out of the restaurant. (高見・久野(1999))

(14a)では、雪崩が谷へ至るまでの間ずっと転がり落ち続けたことが含意されているし、(14b)では、ジョンがレストランの外へ移動する間ずっとげっぷをし続けたということが含意される。

ここで、(14b)の解釈に注意してもらいたい。(14a)の動詞rollは本来的に継続的行為を表しうるが、(14b)の動詞belchは本来的には瞬間的行為を表すので、「動詞の表す行為が指定された距離全体に及ばなければならない」という制約を満たすためには必然的に動詞の表す行為が繰り返し行われなくてはならないということになる。再び、(16)の対比を考えてみよう。

- (16) a. John belched *his way* out of the restaurant.
b. John belched when he went out of the restaurant. (高見・久野(1999))

(16a)のone's way構文では、げっぷが繰り返し行われたという含意があるが、(16b)には行為の繰り返しという意味はなく、ジョンは1回だけげっぷをしたかもしれないのである。したがって、one's way構文の主動詞はその本来的な相特性に関わらず、「動作の継続」という出来事(event)を表さなくてはならないといえる。そして、これはone's way構文に生じている動詞が表す出来事(event)は、常に行為動詞(activities)が表す出来事(event)と同じように解釈されているということの意味する。

次に、one's way構文自体の相特性について考えてみよう。1. 1節で見たように、あらゆるone's way構文に共通する意味は「主語指示物が指定された距離を移動していく」というものである。よって、ここでは、one's way構文自体は「移動」を表すものと仮定して、one's way構文における「移動」という出来事(event)の持つ相特性について考えることとする。

one's way構文に表される「移動」は有界(bounded)の出来事(event)であると言える。例えば、前出の(14)について考えてみると、(14a)では雪崩の移動という出来事(event)の終点を雪崩が谷へ至った時点と特定できる。(14b)では、ジョンがレストランの外へ出た時点がジョンの移動という出来事(event)の終点である。^{*8} 主動詞の相特性に関わらず、one's way構文

^{*8} 注4で見たように方向を表す副詞が共起し、手「移動」の着点が明示されない場合もある。しかし、高見・久野(1999)が示したように、one's way構文では常に主語指示物が移動していく一定の「経路」の存在が含意されなくてはならない。本稿の分析では、このように着点が明示されない場合でも「移動」の着点、すなわち「経路」の終点は何らかの形で暗示されていると考えておく。

自体が有界の出来事 (bounded event) を表すということは、(40)と(41)の対比からも明らかである。

- (40) a. Babe Ruth homered better than anyone else (?in an hour/for an hour).
b. John insulted his boss (*in five minutes/for five minutes).
c. Mary embraced her cousin (*in one minute/for one minute). (Tenny (1994))
- (41) a. Babe Ruth homered his way into the hearts of America (in a year/?for a year).
b. John insulted his way across the room (in an hour/?for an hour).
c. Mary embraced her way through the reunion crowd (in an hour/?for an hour). (Tenny (1994))

(40)で「in +時間」が生じると非文となる。これは、それぞれの動詞が有界の出来事 (bounded event) を表すことができないということを示している。ところが、これらの動詞がone's way構文に生じると、(41)に示されるように「in +時間」と共起することが可能となる。^{*9} これは、one's way構文に生じる動詞が有界の出来事 (bounded event) を表すことができない場合でも、構文全体としては有界の出来事 (bounded event) を表すことができるということを示している。このことから、one's way構文は、構文固有の相特性として有界性 (boundedness) を持っていると考えられる。

本節のこれまでの議論により、one's way構文は有界の出来事 (bounded event) を表すが、この構文に生じている主動詞は継続的行為を表すということがわかった。この継続行為は、主語指示物の移動が終着点に達するまで、この移動に随伴して行われるものである。この解釈こそがone's way構文に固有の特性なのである。そして、このone's way構文に特有の相特性は、影山・由本 (1997) のようにCAUSEという概念を含む複合的なLCSを仮定する分析でとらえることはできないということも示した。

3. 相特性変更規則

第3節では、本稿でのone's way構文の分析を提示する。^{*10} 英語では相特性を変更する規則を語彙レベルで適用でき、その適用した結果として生じるのがone's way構文であると主張していく。まず、one's way構文の解釈について達成動詞 (accomplishments) との比較という観点から考察してみよう。

前節で、one's way構文は有界の出来事 (bounded event) を表すが、この構文に生じている

^{*9} Tenny (1994) によると、(41)でfor句が生じた場合の文法性は話者によって判断に揺れがあり、容認不可能とまでは言えない。(41)で有界の出来事 (bounded event) を表すにも関わらずfor句と共起できるのは、このfor句が「時間的距離」を表し得るため、one's way構文における経路表現として解釈されるためであるかもしれない。つまり、(i)のthrough the 60'sと同様に解釈されているのかもしれない。

(i) He gambled his way *through the 60's*, and then later became a church preacher.

^{*10} ただし、本稿では「経路」を示す前置詞句や副詞を伴わないone's way構文とmake one's wayは扱わない。

主動詞は継続的行為を表すということを論じた。この解釈は、単に達成動詞 (accomplishments) が表す出来事 (event) と同じものであると考えることもできる。なぜなら、両者とも、終点 (end point) とそれに至る過程 (process) を含む出来事 (event) を表すからである。そこで、達成を表す出来事の内部構造について、もう少し詳しく見てみよう。達成を表す出来事 (accomplishment) において終点 (end point) と過程 (process) のどちらが明確に特定化されているかについて注目すると、(42)の文がそれぞれ異なった性質を持つことがわかる。その分類を(43)の表に示す。

- (42) a. John broke the vase.
 b. John ran a mile.
 c. John wiped the floor clean.
 d. John ran to the station.

(43)

	過程 (process)	終点 (end point)
a. John broke the vase.	—	+
	—	—
b. John ran a mile.	+	—
c. John wiped the floor clean.	+	+
d. John ran to the station.		

(43a)では、「花瓶が壊れた状態になる」ということで出来事の終点が特定化されているが、その最終的な結果状態に至るまでの過程については、その過程が存在することを含意するものの、その過程がどのようなものであるかについては何も明示していない。(43b)は、ジョンが指定された距離の終点まで走り続けたということを意味する。この場合、スタートから1マイル地点に至るまでの過程については「走る」という継続動作を行っていたという特定化がなされているが、出来事の終点については「走る」という継続動作が1マイル地点で終わるという含意で特定されるだけで、終点の詳細については明示されていない。(43c, d)では、「拭く」「跳ぶ」といった行為が行われたというように過程が特定化され、さらに終点における状態についても「床がきれいになった状態」や「ジョンがハリエットの腕の中にいる」といったように特定化されている。

ここで、(43b)と(43c, d)は過程について特定化がなされる有界事象を表すという点で共通しているということに注意してもらいたい。有界事象を表しながら過程について特定化がなされているのは、有界事象を表すという相特性が動詞そのものではなく文全体の特性であり、過程（すなわち継続的動作）を表す動詞との合成によって得られるものだからである。つまり、動詞runやwipe、jumpは行為動詞 (activities) であり、“John ran”、“John wiped the floor”、“John jumped” は行為動詞が本来的に持っている「過程」の解釈しか表さない。しかし、“a mile”、“clean”、“into Harriet’s arms”といった終点を表す語・句と共起することにより有界事象を表すことができるようになるのである。^{*11}

^{*11} 行為動詞を伴う構文が有界事象をあらわすという事実についての詳しい議論については、Tenny (1994) を参照。

このように(43b)と(43c, d)は非常に似ているが、終点の特定化について異なっている。この終点の特定化における相違があるために、(43b)と(43c, d)の解釈も大きく異なってくる。その解釈の相違とは、(43b)は(43c, d)と違って終点の特定を行わないため、おのずと過程に焦点が当てられるということである。このため、過程の解釈について見ると、(43c, d)ではwipeやjumpによって表される動作が行われる過程の存在だけが示されているが、(43b)では、終点まで「走る」という動作がずっと行われていたという継続の解釈が色濃く残っているのである。

以上のように達成を表す出来事をより細かく分類してみると、前節で見てきたone's way構文の全体としての解釈が(43b)に該当することがわかる。すなわち、(43b)とone's way構文は両方とも、構文全体としては有界の事象を表すにも関わらず、過程における継続行為に焦点を当てる解釈をもっている。このことから、one's way構文では、(43b)の“a mile”のような終点を含む一定の距離・時間を表す目的語を取ることによって、行為動詞が「一定期間のあいだ継続される行為」という有界事象を表すことができるようになると仮定しよう。この規則は動詞の相特性を変更するものなので、語彙レベルで適用されるものであるが、ここでは(44)に示すようにLCSに適用される規則であると考えられる。

(44) [x ACT (ON w)] → [x ACT (ON w) [α]]

(44)で、 α はある一定の期間あるいは距離を表す空の項で、(43b)の“a mile”に対応するものである。(Tenny (1994)のDelimiting Argumentと同じ働きをするものである。) (44)の規則が適用されると、この α が存在することによってACTが表す行為の継続状態が及ぶ範囲が限定され、継続的行為に焦点を当てながら有界の事象を表すという特殊な相特性を持つ動詞が派生されるのである。そして、この α はone's wayとして具現化される。 α は空の項で、one's wayはその具現形にすぎないので、(44)が適用された語彙レベルの段階では何ら指示対象をもたず、単にACTによって表される行為の継続状態が及ぶ範囲を限定する意味しか持たない。このため、one's wayの指示対象を決定するために「経路 (path)」を表す句 (前置詞句あるいは副詞) の共起が要求されるのである。one's way構文が(43b)と異なり、ほとんどの場合終点を明示するのは、one's wayとして具現化された α が、そのままでは指示対象が決定されず不適格となってしまうためである。

(44)によると、この規則の適用後もone's way構文はMOVEという概念をLCSに含まないということになるが、それではone's way構文の「移動」の解釈はどこから生じるのだろうか。本稿の分析では、この「移動」の解釈はMOVEという概念によってもたらされるのではなく、(44)の規則適用後のLCSから派生的に得られるものであると仮定する。行為動詞のACTによって表される継続的行為は、ひとつひとつの行為を表す点の単なる集合として表すことができる。ところが、一旦その行為が及ぶ範囲の始点と終点が決定され、時間軸上に行為を表す点が並べられると、ひとつひとつの行為を表す点は線分として認識される。つまり、「一定の経路に沿って、ある行為がずっと継続していった」という解釈から転じて移動の意味が得られるということである。たとえば、“John jumped his way into her arms”の場合は、「ジョンは彼女のところまで、ずっとジャンプし続けた」という意味が得られ、この意味の自然な解釈として「移動」の解釈が得られるということである。

さて、one's way構文は(44)の規則を規定となる動詞のLCSに適用することによって派生され

ると仮定したが、(44)の規則はどのような動詞に適用できるのでしょうか。(44)の適用に関する制限を見ていくことにしよう。まず(44)の規則は、(43b)の派生と同様の方法で(43b)と同様の解釈を語彙レベルでもたらしめるものであるということをお願いしたい。つまり、継続的動作を表す動詞すなわち行為動詞 (activities) が一定の物理的・時間的距離を目的語としてとることによって、その物理的・時間的距離の範囲内において動作が継続されることを表すようになる。(43)で見たように、出来事 (event) の過程 (process) の部分を特定化する解釈は、動詞のみによって表されることはなく、行為動詞 (activities) と終点を含意する語・句 (あるいは構文) との合成によって得られるものである。このことから、(44)の適用を許す動詞は「行為 (activity)」を表す動詞に限られるということになる。

(45) one's way構文を派生する規則(44)が適用される動詞は、継続的行為 (activity) を表す動詞でなくてはならない。

(45)の制約が正しいとすると、本来的な「行為 (activity)」を表す動詞は規則(44)の適用を容易に許すものと予測される。そして、実際、one's way構文に行為 (activity) を表す動詞が生じることが非常に多いという事実がよく知られている。(Jackendoff (1990)、Levin and Rappaport Hovav (1996) などの議論を参照。) また、one's way構文が非能格性を診断するテストであると誤って認識されるほど非能格動詞を伴うone's way構文の生産性が高いのも、(45)の制約が存在するためであると考えられる。^{*12} つまり、「行為 (activity)」を表す動詞のほとんどが非能格動詞であるからである。

ところが、(45)の制約に対する反例はすぐに見つかる。例えば、(46-47)について考えてみよう。

- (46) a. drink beer *in an hour/for an hour
 b. Mary drank (*in an hour/for an hour).
 c. Mary drank a jug of apple wine (in an hour/*for an hour). (Tenny (1994))
 d. Sally drank her way through a whole bottle of lemonade. (高見・久野 (1999))

- (47) a. Bill *belched* his way out of the restaurant.
 b. ...volunteers *sneezed* and *coughed* their way through years of tests ...
 c. The kid *jumped* his way to the sandbox. (高見・久野(1999))

(46a,b)と(46c)の対比は、動詞drinkが補部に何をとりかによって、構文全体があらわす事象の

^{*12} しかし、swim,walk,runなどの非能格動詞がone's way構文に生じると不適格となる例がある。

(i)a. ? *He *swam* his way from one end of the pool to the other.

b. *He *walked* his way to the store. (高見・久野 (1999))

この例についての明確な分析は本稿では示さないが、この例が不適格なのはおそらく、「継続的動作」と「移動」を表すために用いられる特別な (有標の) 表現に、本来的にこれらの意味を持つ動詞が生じているためであると考えられる。実際、これらの動詞が本来持っている意味ではなく、「手段」と解釈される場合は、one's way構文に生じることができる。

(ii)a. He *swan* his way to fame/three gold medals.

b. Gandhi *walked* his way across the country to win democracy for his people. (高見・久野 (1999))

相特性が異なってくるということを示している。(46a,b)のように目的語をとらないか質量名詞 (mass noun) を目的語とする場合は、継続行為 (activity) を表すが、(46c)のように目的語が特定の量の物質を表すときは達成 (accomplishment) を表す。(45)の制約によると、(46c)の “drink” はone’s way構文に生じることができないと予測するが、事実はこれに反して、これは(46d)に示されるように適格である。また、(47)に生じている動詞は瞬間的な出来事 (achievement) をあらわすものであり、よって(45)の制約は(47)のone’s way構文は非文となると誤って予測してしまう。よって、(45)の制約は強すぎるということになる。このことから、(45)の制約を(48)のように改訂する。

(48) one’s way構文を派生する規則(44)が適用される動詞は、継続的行為 (activity) を表すことが可能な動詞でなくてはならない。

(48)は、one’s way構文に生じている動詞は常に継続的行為 (あるいは過程 (process)) を表すものと解釈されることを意味している。行為動詞以外の動詞が継続的行為を表すことができるようになる方法は、2通りある。まず第1に、(47)の動詞自体は瞬間的な出来事 (achievement) をあらわすが、この瞬間的な出来事が繰り返し起こることによって継続的行為を表すことができる。よって、(47)の動詞は(48)の制約を満たし、one’s way構文を派生する規則(44)の適用が可能となる。これに対し、繰り返し起こることが不可能な事象を表す動詞は、(48)の制約に違反するため規則(44)の適用が許されず、one’s way構文に生じることができない。

(49) a. *The window *opened/broke* its way into the room.

b. *The apples *fell* their way into the crates. (高見・久野 (1999))

(49)の動詞は、本来的に出来事の終点を動詞の意味に内在させており、(49a)では結果状態が(49b)では移動の方向が特定されている。さらに、これらの動詞によって表される出来事が同じ対象物 (ここでは主語指示物) において繰り返し行われることは不可能である。従って、(49)の動詞は(48)の制約を満たすことができない。

行為動詞以外の動詞が継続行為を表すことが可能になるもう1つの方法は、達成を表す表現 (accomplishment) において、この出来事 (event) を構成する過程 (process) と終点 (end point) のうち過程 (process) のみを取り出して、これをある程度の時間継続する行為 (activity) と見なす方法である。これは、動詞の相特性を変えるのではなく、過程 (process) と終点 (end point) から成る複合的な相の中で焦点をあてる部分を変えることによるものである。したがって、この方法は複合的な相をもつ達成を表す表現 (accomplishment) だけに許されるものである。例えば、(46c)の達成を表す表現 (accomplishment) では、メアリーが「飲む」という行為を行った過程の存在と、その結果「ワインが水差しに1つ飲み干されてなくなった」という終点が表されている。ここで、このメアリーが「飲む」という行為を行った過程をとりだし、「メアリーが飲み続けた」という継続行為と解釈し直し、ワインが水差しに1つ飲み干されて無くなることでこの継続行為が及ぶ範囲が限定されると考えるのである。つまり、「ワインが水差しに1つ飲み干されてなくなるまで、メアリーは『飲む』という行為をずっと行っていた」というように解釈し直すのである。したがって、この解釈が成り立つためには、「過程」がある程度の長

さを持たなくてはならない。なぜなら、「過程」がある程度の長さを持たないと、継続行為として解釈できないからである。このことは、以下に示す対比に表されている。

(50) a. Sally drank the glass of lemonade.

b. Sally drank a whole bottle of lemonade.

(51) a. ??Sally drank her way through the glass of lemonade

b. Sally drank her way through a whole bottle of lemonade. (高見・久野(1999))

(50a)と(50b)とでは、出来事(event)の終点(end point)に至るまでの過程(process)の長さが異なる。(50b)では、「飲む」という行為で表される過程(process)は継続的行為と解釈されるのに十分な長さを持っているが、(50a)ではそれほどの時間的長さは存在しない。例えば、「サリーはレモネードを休まず飲み続けてボトル1本飲んでしまった(50b)」ということ是可以するが、「サリーはレモネードを休まず飲み続けてグラスに1杯飲んだ(50a)」とは言えない。そのため、(50a)のdrinkは継続行為と解釈されることができず、(48)の制約を満たすことができない。その結果、(50a)に対し(44)のone's way構文を派生する規則を適用することができず、(51a)は不適格となる。他方、過程(process)の長さが継続的行為と解釈されるのに充分である(50b)は、(48)の制約を満たすため(51b)のような適格な構文を派生するのである。

以上、本節では、one's way構文の「動詞+one's way」の部分が“John ran a mile”と同じ相特性を持つということを主張してきた。そして、この主張に基づき、one's way構文は(44)の動詞の相特性を変更する語彙規則の適用によって派生されるということ、そしてこのone's way構文を派生する規則は継続的行為(activity)を表すことが可能な動詞にだけ適用することができると提案した。本稿の分析は、一見、Jackendoff(1990)の「one's way構文の動詞は本来的に過程を表すものか、有界の事象が繰り返し行われるということを表すものでなくてはならない」という分析と同じように見えるが、必ずしも動詞の相特性だけによってone's way構文の適格性が決定されるわけではないという点で異なる。よって、本稿の分析は、(51a)のようなJackendoff(1990)の分析でうまく扱えなかった事例も取り込むことができるのである。

4. 帰 結

それでは最後に、帰結として、高見・久野(1999)で提示された機能的制約のほとんどが本稿での分析から導き出されるということを簡単に述べておく。(9i)と(9iii-iv)の制約は、one's way構文が(44)の規則を適用した結果生じるものであるということから導き出される。

(9) Way構文に課せられる機能的制約：Way構文は、

(i) (ありきたりのものではない) 物理的、時間的あるいは心理的距離が存在し、

(ii) 主語指示物が、独自の状態で

(iii) その距離全体を徐々に移動し、

(iv) 動詞がその移動の様態を表す

場合にのみ、適格となる。

(高見・久野(1999))

(44) [x ACT (ON w)] → [x ACT (ON w) [α]]

(44)の規則が行為を表す動詞に適用されると、ある程度の時間的・物理的長さをもつ期間・距離を表す α (one's way) が生じ、この α の指示対象が決定されなくてはならない。そのため、構文は必ず何らかの物理的、時間的あるいは心理的距離を示さなくてはならなくなる。そして一旦(44)の規則が適用されると、動詞は継続的行為の解釈を持ち、構文全体としては「 α によって与えられる経路に沿って主語指示物がずっとある行為を行い続けた」という解釈を持つ。この継続的行為の解釈から(9iii)の制約が導き出される。つまり、「休むことなく行い続ける」という意味から「徐々に移動する」という解釈が得られるのである（おそらく、両方とも進行形に近い意味を持っているものと考えられる）。そして、「 α によって与えられる経路に沿って主語指示物がずっとある行為を行い続けた」というone's way構文の意味から転じて移動の解釈が得られるので、主動詞は「移動そのもの」を表すことはなく、常に移動に伴う継続的行為や様態を示す。すなわち、(9iv)の制約は、(44)の規則を適用した後も、動詞のLCSがMOVEという概念ではなくACTという概念を保っているということから導き出されるものである。

さらに、本稿での分析は、Goldberg (1995) で論じられている困難性の含意も適切に導き出すことができる。ここでの分析によると、one's way構文の意味は「 α によって与えられる経路に沿って主語指示物がずっとある行為を行い続けた」というものである。ある行為をある程度の長さを持った時間（距離）の間ずっと行い続けるというのは、行為によっては当然困難になってくる。よって、ある一定の期間続けるのが困難だと思われる行為を動詞が表しているとき、one's way構文は困難性を含意すると考えられる。そして、ある程度の長さを持った時間（距離）の間ずっと行い続けるのが困難になる可能性のある行為とは、(47)や(51)で示したような継続行為を表すものと再解釈された上で(44)の規則が適用されているものであると考えられる。逆に、本来的に継続行為を表しうる行為動詞 (activities) によって表される出来事は、ある程度の長さを持つ期間持続するのが当然で、よって困難性の含意は生じにくいと思われる。そして実際、Goldberg (1995) によると、(52a)のように動詞が本来の相特性や意味を保持していない手段の解釈を持つone's way構文の場合は、困難性の含意があるが、動詞が本来の相特性や意味を保持している(52b)のような様態を表すone's way構文では主語指示物の移動に困難性が伴うという解釈はない。これは、まさに本稿での分析の予測と一致する。よって、one's way構文における困難性の含意は、この構文が持つ継続行為の意味から導き出されるものであるといえる。

(52) a. For hours, troops have been *shooting* their way through angry, unarmed mobs.
(手段)

b. Joe *whistled* his way to the street. (様態) (高見・久野 (1999))

以上、本稿では、one's way構文の派生について相特性の観点から考察を行った。第1節においては、影山・由本(1997)の分析が誤りであるということ述べ、特に、one's way構文の相特性はCAUSEという概念をもつ複合的LCSによって表すことができないものであるということ主張した。第2節では、one's way構文の相特性は、達成動詞 (accomplishment) と同様に過程 (process) と終点 (end point) から成るが、過程として表される行為が一定期間の間継続して行われるということに焦点を当てるといふ点で特殊であることを示した。第3節で、この

one's way構文に特有の相特性は、“John ran a mile”の相特性と同じであると主張した。そして、それは“John ran”から“John ran a mile”を派生する規則と同じ規則が語彙レベルで適用されているためであると提案した（よって、one's wayという句はTenny（1994）のDelimiting Argumentと見なすことができる）。また、この規則が適用されるために、語彙レベルで動詞の相が再解釈されることがあるということも示唆した（(47), (51b)参照）。さらに帰結として、高見・久野（1999）で提示されたWay構文に課せられる機能的制約の大部分とGoldberg（1995）で論じられている「困難性」の含意が、ここでの分析かから導き出されるということを述べた。

参考文献

- Dowty, David R. (1979) *Word Meaning and Montague Grammar*. Dordrecht: Kluwer.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Hale, Kenneth, and Samuel Jay Keyser (1987) “A View from the Middle,” *Lexicon Project Working Papers 10*, Cambridge, MA: Center for Cognitive Science, MIT.
- Jackendoff, Ray. (1990) *Semantic Structures*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 影山太郎（1995）「概念構造の合成とone's way構文」『英米文学』40: 1, 179-202. 関西学院大学英文学会.
- 影山太郎・由本陽子（1997）『語形成と概念構造』東京：研究社.
- Levin, Beth. (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Levin, Beth, and Malka Rappaport Hovav. (1989) “An Approach to Unaccusative Mismatches,” *CLS 25*, 314-329.
- Levin, Beth, and Malka Rappaport Hovav. (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Levin, Beth, and Tova R. Rapoport. (1988) “Lexical Subordination,” *CLS 24*, 275-89.
- Marantz, Alec P. (1992) “The Way-Construction and the Semantics of Direct Object Arguments in English: A Reply to Jackendoff,” in T. Stowell and E. Wehrli (eds.) *Syntax and Semantics 26: Syntax and the Lexicon*, 179-88. New York: Academic Press.
- Rappaport Hovav, Malka, and Beth Levin (1996) “Building Verb Meanings,” ms., Bar Ilan University and Northwestern University.
- Ritter, Elizabeth. and Sara Thomas Rosen. (1996) “Strong and Weak Predicates: Reducing the Lexical Burden,” *Linguistic Analysis*, 26. 29-62.
- Smith, Carlota S. (1991) *The Parameter of Aspect*. Dordrecht: Kluwer.
- 高見健一・久野暁（1999）「Way構文と非能格性（1）-（3）」『英語青年』第145巻、128-133, 145, 214-223, 324-330.
- Tenny, Carol L. (1994) *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*. Dordrecht: Kluwer.

- Verkuyl, Henk J. (1993) *A Theory of Aspectuality: The Interaction between Temporal and Atemporal Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*. Ithaca, New York: Cornell University Press.